

## 一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

### 1. まえがき

我が国の禅文化を学び語る時、禅画の中でも達磨画は大きな源流といえる。

我が国には、奈良時代の仏教伝来とともに達磨大師の御名は伝えられていたといわれている。しかし、その人物像と教えがくわしく紹介されたのは、鎌倉時代以降で、中国では宋の時代である。

この時代の達磨画は、僧侶、在家信者、文人墨客まで多くの人々によって描かれているが、小生との出会いは、清貧な教育者の次男坊に生まれ、母方のお寺にあずけられたことにはじまる。

小学校に就学前のいたずら坊主は、よく達磨像の前にすわらせられた。お寺の本堂は静寂で、恐く、淋しかったが小生にとっては、達磨大師は唯一の友達のような存在であった。

知らず、知らずのうちに達磨画を書くようになった。お寺の小坊主の修行に耐えられず、母恋しと逃げ帰った思い出は、小生の人生に大きな影響を与え、挑戦し努力する気持を教え育まれたと思っている。

今回は、我が国に仏教が伝来し、禅文化として、日常の生活のなかにとけ込み生かされている事柄について述べることにする。

毎年、大学を巣立つ有為な若者に達磨画に偈を書き加わえ贈呈している。その偈に秘められた仏教の教えなどを理解していただければ幸である。

### 2. 達磨大師とは

一般に、南インド（南天竺<sup>ナンツツ</sup>）の出身で、大バラモン（婆羅門）国、いわゆる香至国の第三王子といわれているが生没年は未詳である。

般若多羅に学び、普通元年（西暦520年）に中国本土に上陸されたといわれている。そして、実績や結果を自慢し行動する中国の武帝との出合が、いろいろと語り継がれていますが、「無功德」と武帝の行為を批判した有名な話は、恩徳心や慈悲心の善行を自慢する心をいましめた話ですが、やはり、嵩山少林寺での九年間の面壁の修行の困難との戦いの偉大さの方が有名だし、かつて現地を訪問したことのある小生は、人並の精神力では、禅の世界でいう面壁、いわゆる壁と人間の孤独な対話、壁観は絶対に不可能だと思われる程の断崖絶壁の洞窟を知っているので、修行の苦難は想像を絶するものがあったと考えられる。

現存する岩窟だけが達磨大師の壁観の本当の心を知っているのではないかと小生は愚考する。

達磨、もしくは達摩と書いてダルマと読まれているが、いうまでもなく、禅宗の初祖のことで、くわしくは菩提達磨というのが正式の名前であり、サンスクリット語の Bodhi-dharma の中国語の音訳である。

Bodhi は覚であり、dharma は法という意味である。いわゆる仏教では法＝真理である。中国禅宗の初祖としての史実は、はっきりした事はわからないが、中国の仏教書「宝林伝」によると菩提達磨の伝法偈として「我本来此土、伝法救迷情、一花開五葉、結果自然成」が残されている。その大意は「我れこの国に来て、真理を伝え、迷情を救う。一花、五葉を開いて、結果自然に成る」。いわゆる自分の教えを五人の弟子に伝えたことを述べている。

### 3. 達磨画と偈の教え

達磨画には、よく偈が書かれている。自筆の達磨画の偈の「眉毛横眼上」は、「眉毛眼上に横たわる」と読み、意味は、人間いかに偉そうな事をいっても、自分の目に一番近い眉毛すらも満足に見ることは出来ない、だから謙虚になって物事を見、考えることが重要だという教えである。

禅宗では、次のような教えがある。「教外別伝」（仏の悟り、いわゆる教えは経文に説かれるのではなく、心から心に直接伝えられる）。「不立文字」（悟りは、文字、言説をもって伝えることができず、心から心へ伝えるものである。文字は教え

著者：広島大学生物生産学部講師  
近畿大学産業理工学部客員教授  
日本禅画家協会名誉理事  
中国少林書画院名誉教授  
法号位 法印 禅画位 奥伝  
青木伸雄  
(野風生)  
雅号 樹泉